第七回南国市民学校が五月十一日から二十八日まで六回にわたって大篠公民館で開かれ、初日には六十人余りの市民が受講しました。

広報では、都合により受講できなかった方のために、その一部を取り上げて掲載します。

市民学校から①――

南国市小史を語る

北岡　博氏（南国市文化財審議会長）

南国市二千数百年の先人の歩みについて誰もが当然知っていることをお話ししたいと思います。

先人の歴史の元に自然を考えなければなりません。南国市は、物部川から川が放射状に流れ、自然堤防や後背湿地が形造られており、南国市をつくる文化、産業の元になっています。

考古学者は、南国市は県下第一の考古学の宝庫であると言っています。これは、古くから人々が居住しており、土佐の先進地であったことを意味しています。

先土器時代や縄文時代については、これといった遺跡は見つかっていませんが、弥生時代の遺跡はたくさん出土しています。特に西見当近辺の田村遺跡群は、県下第一級の弥生遺跡群です。これは、物部川の自然堤防に人間が生活し始めた遺跡です。ここから掘り出された土器にもみがらの跡が付いていたことから稲作と関係があることがわかりました。空港拡張による調査で昔の水田や弥生人の足跡まで見つかりました。これらはやがて資料館に展示されると思います。田村には大きな集落が形成され、田村の集落を元にして、各地に分村が進んだことが想像されます。

弥生時代晩期になると弥生文化は衰退し、集落は周辺のより高い所（三畠遺跡、五軒屋敷遺跡など）に移動します。

次の古墳時代は、前期、中期、後期に分けられます。高知平野には百八十基～二百基の古墳があると言われていますが、その半分以上は南国市にあります。

古墳は首長や豪族のものですが、古墳を考えるときには、造営者の群れを考えなければなりません。このように、文化や産業に注目するのが歴史的考察なのです。

六世紀の終わりから七世紀にかけて古墳が小さくなるのは、大化の改新で大きな墓を造ることが禁止されたからです。大化の改新で出された班田収授の法は、香長平野の条里制につながります。一の坪や二の坪などの名称は、その名残です。

土佐の国衙は比江の地にあったと思われます。それは、比江廃寺塔跡からもうかがわれます。あのような寺があったのは、その周辺の文化が発達していた証拠です。古墳群が最も集中し、昔から文化の香が高い所、交通の便がよく、軍事上の要害、加えて景色のよい比江が国衙として適切であったと思います。国衙がいつできたかは不明ですが、国司の大部分は土佐のために尽くしたと思います。その代表は紀貫之で、在任中土佐のために尽くしたことは「土佐日記」のところどころに出ています。

鎌倉時代には、守護と地頭が置かれました。土佐の守護所がどこにあったかは、土佐の歴史の中でわからないことの一つですが、四国の他県は国衙の近くにあります。

段々守護が力を持ち、守護領国制が展開します。土佐と讃岐の守護は細川氏です。これは関東管領の細川氏と同族ですが、その関係で田村庄へ入りました。細川氏四代が支配していた間、田村は文化の花を咲かせ、経済的にも非常に発達しました。地頭のなかで細川氏と最も親交があったのが長曽我部氏で、細川氏が京へ去った後、勢力を持ちます。

長曽我部氏は、兼序の時代に、本山、吉良、大平、山田の四氏に攻められます。兼序の子は幡多の一条房家を頼って逃げ、元服後岡豊に戻ります。その国親は四氏を討つ途中で急死して元親が跡を継ぎ、土佐を統一、さらに四国を統一します。

元親を一つ見直しておかなければならないのは、戦国の名将には変わりないが、他の武将が領土を広げるのにあくせくしているときに、民政や学問に熱心であったことです。長曽我部文化が花を咲かせ、法律や地検帳など、多くの文化的遺産が残っています。儒学の忠孝の教えは土佐の南学の根幹となり、谷秦山の学道につながり、さらに維新の土壌にもつながります。

近世になり、山内氏が土佐へ入ってからは南国市は政教の中心ではなくなり、動から静の時代へ移ります。山内氏が心をくだいたのは長曽我部氏の遺臣のことです。そこで、新田を開発した者を郷士としてとりたてることにし、賦課役人として勢力を張る者や役地を開発する者が出ました。

江戸時代中期以降、生活が苦しくなると新郷士が生まれました。彼らには儒学や国学の影響が強く、やがて勤王家が出て、維新の基礎が頭をもたげてきます。